



新たな親密性尺度の作成

谷, 冬彦
原田, 新

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5(1):1-7

(Issue Date)

2011-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81003433>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003433>



新たな親密性尺度の作成 Development of the New Intimacy Scale

谷 冬彦* 原田 新**
 Fuyuhiko TANI* Shin HARADA**

要約：本研究は、従来の親密性尺度が、Erikson の記述に基づいておらず、内容的妥当性に問題があるため、Erikson の記述に忠実に基づき、漸成発達理論に一致する新たな親密性尺度を作成することを目的とした。Erikson の記述から、「相互性」と「呑み込まれ不安」を考慮し、1次元構造の尺度を仮定して、項目収集を行った。主成分分析の結果、仮定通り、1次元構造が確認され、内的整合性の観点から、信頼性も確認された。また、基本的信頼感尺度、多次元自我同一性尺度 (MEIS)、異性不安尺度との関連から、構成概念的妥当性が確認された。さらに、漸成発達理論における前の段階の構成要素が後の段階の構成要素に影響を及ぼすという仮定の下に、「基本的信頼」から「同一性」、「同一性」から「親密性」に影響を与えるという因果モデルを構成し、パス解析を行ったところ、高い適合度を示し、多母集団同時分析の結果からは、男女ともに同一のモデルが適用できることが明らかになった。これらのことから、Erikson の漸成発達理論と様々な点で一致する妥当性が確認され、有用性が高い新たな親密性尺度が作成された。

Keywords：親密性、尺度作成、漸成発達理論、妥当性、信頼性

1. 問題

Erikson (1950, 1959, 1968, 1982) は、人間の心理社会的発達を8つの構成要素の漸成発達に基づくものであるという理論を定式化した。これを漸成発達理論という。8つの構成要素は、身体的、認知的、情動的、社会的発達が進んだある段階、すなわち発現継起において、それぞれ優勢な危機を迎えることになる。漸成発達理論では、この優勢な危機が、各発達段階を形成し、乳児期から老年期に至るまで、第I段階から第VIII段階の8つの発達段階があると仮定されている。漸成発達理論における8つの構成要素は、発現継起を迎える前にもその前駆的なものが存在し、発現継起を過ぎた後も、その段階における「感覚」として残存するとされる。Erikson (1959) によれば、各発達段階において優勢になる構成要素は、“他のすべての構成要素と体系的に関連しあっており、それらすべては各構成要素の適切な連続的発生における適切な発達に依存している。” (p.54) とされている。すなわち、各構成要素は、それぞれ関連しあっており、ある段階における危機の相対的な達成は、その後の危機解決の在り方に影響を及ぼすことになるということである (谷, 2008)。

Erikson は、漸成発達理論において、青年期の発達段階にあ

る第V段階の「同一性対同一性拡散」の危機の次にあたる発達の第VI段階を「親密性対孤立」としている。Erikson (1959, 1968) によれば、この段階においては、異性との親密性を中心としながらも、これと関連した形での他の人々との親密性を形成することが重要となる。つまり、この段階においては、単に異性との親密性を築くだけでなく、様々な人々と親密な関係を結ぶことが必要になってくる。

Erikson (1959, 1968) によれば、このような親密性を形成するにあたって、まず重要なのは「相互性」(mutuality) というものである。「相互性」とは、お互いの欲求を満足させあうことができるような関係性のことをいう。つまり、人間関係の中で、互いの欲求を認め合い、相互に欲求を満足させられるような関係性を築けることが相互性をもった親密性であるといえよう。そのような相互性をもった親密性が築けないと、人間関係からの孤立を招き、疎外感に悩むこととなると、Erikson の漸成発達理論では指摘されている (Erikson, 1950, 1959, 1968, 1982)。

また、Erikson (1959, 1968) は、真の親密性が可能になるのは、適切な同一性の感覚が形成された後だけであるとしている。そして、Erikson (1959) は、“他人たちと本物の「かかわりあい」を結ぶことは、確固たる自己確立の結果であると同時に自己確立の試練でもある” (p.134) と述べている。つまり、しっかりとし

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

(2011年4月15日 受付)
 (2011年4月16日 受理)

た同一性の感覚が得られていない場合には、親密性を築くことが困難であることを指摘している。その上で、Erikson (1959, 1968) は、同一性の感覚が得られていない状態で、人とかかわりあいを結ぼうとする時に、ある種の緊張を経験すると指摘する。その緊張とは、同一性の喪失を引き起こしそうな対人的融合 (interpersonal fusion) になってしまうのではないかという緊張である。この種の緊張を消し得ない場合、青年は自分を内的に孤立させ、せいぜいごくステレオタイプ化され形式化された対人関係をもつだけになってしまうと、Erikson (1959, 1968) は述べている。すなわち、同一性の感覚がしっかりと得られていないと、人とかかわりあいは、同一性の喪失を引き起こすような脅威となり、対人的融合を引き起こすのではないかという「呑み込まれ不安」を感じ、親密な対人関係をもてなくなってしまうのである (大野, 1995)。真の親密性を築くためには、このような呑み込まれ不安を感じることなく、相互性をもった深い人間関係を結ぶことが必要であるといえるであろう。

さて、このような Erikson の親密性概念を測定しようとする尺度は、Erikson によって提唱された各発達段階における構成要素の感覚を測定する尺度、すなわち、Erikson による心理社会的発達段階に基づく尺度が、これまでいくつか作成されており、その中の第VI段階に関する尺度が存在する。

Erikson による心理社会的発達段階に基づく尺度として、初期的であり、代表的な尺度が、Rasmussen (1964) による尺度である。Rasmussen (1964) は、Erikson の心理社会的発達段階の第I段階から第VI段階までの感覚を測定する尺度を作成した。各段階について、それぞれ3つのサブカテゴリーが設定されており、それぞれについて4項目、合計72項目から構成されている (鑪・山本・宮下, 1984)。ちなみに、第VI段階については、「親密な対人関係」、「なじまない人や信念の拒絶」、「対人関係における情緒的孤立」の3つのサブカテゴリーが設定されている。Rasmussen (1964) の尺度は、現在でも、欧米において使用される頻度が高く、日本においては、大学生を対象として、宮下 (1987) がその邦訳版を作成している。

また、Rasmussen (1964) と同様に、Erikson による心理社会的発達段階に基づく尺度としては、Rosenthal, Gurney, & Moore (1981) による EPSI (Erikson Psychosocial Stage Inventory) がある。この尺度は Rasmussen (1964) の尺度が大学生を主に対象とした項目であったのに対して、それよりも、低年齢層 (思春期) に対しても施行できるように項目作成がなされている。調査対象は、14~17歳である。項目作成にあたっては、Erikson (1950, 1959, 1968) の記述を主に参考にして作成したとされている。各段階 (第I~VI段階) ごとに12項目ずつで、半分の6項目ずつが逆転項目になっている。この尺度の日本語版は、高校生から成人を対象として、中西・佐方 (1993) によって作成されている。

その後、同様な観点からは、Oche & Plug (1986) が、これまで成人に対しても施行できる尺度がないことから、Erikson の記述をもとに、乳児期の第I段階から成人後期である第VII段階までの尺度を作成している。この尺度は、民族、年齢、性別などが異なっても施行できるよう、項目が作成されている。調査対象としては、15~60歳の黒人と白人の男女を対象としている。この

尺度の日本語短縮版は、大学生を対象としたデータから、三好・大野久・内島・若原・大野千里 (2003) によって作成されている。

しかしながら、これらの尺度は、いずれも Erikson の記述を参考に項目を作成しているところがあるが、これらの尺度における各段階の尺度項目内容を検討すると、必ずしも Erikson の記述と一致しない項目が散見され、内容的妥当性に大きな問題があるといえる。このような問題から、谷 (1998, 2001a) は、Erikson (1950, 1959, 1968) の記述に忠実に項目を作成し、第I段階の感覚を測定する基本的信頼感尺度を作成するとともに (谷, 1998)、第V段階の同一性の感覚を多面的に測定する多次元自我同一性尺度 (Multidimensional Ego Identity Scale: 以下、MEIS と略記) を作成し (谷, 2001a)、高い信頼性を確認するとともに、Erikson 理論と一致する分析データを示すことによって様々な妥当性を確認している。

そして、このような内容的妥当性の問題は、第VI段階の尺度項目にも同様にみられるものである。先述したように、第VI段階の親密性において、Erikson (1950, 1959, 1968, 1982) が重視した概念は「相互性」である。しかし、これまでの第VI段階に関する尺度には、相互性を反映した尺度項目が存在しない。これは、内容的妥当性の観点からは大きな問題であると考えられる。また、Erikson (1959, 1968) は、親密性の形成において、同一性の喪失を引き起こしそうな対人的融合になってしまうのではないかという呑み込まれ不安が生じる問題を指摘しているが、そのような不安に関する項目が、これまでの第VI段階に関する尺度には存在しないことも同様に大きな問題と考えられる。

したがって、「相互性」と「呑み込まれ不安」の両者について考慮した項目群から構成される新たな親密性尺度の作成が必要と考えられる。

そこで、本研究では、Erikson (1950, 1959, 1968, 1982) の記述をもとに、親密性を「呑み込まれ不安を感じることなく、相互の欲求を満足させ合うという相互性をもった深い人間関係を築くことのできる特性」と定義した上で項目を収集し、新たな親密性尺度を作成し、その信頼性および妥当性について検討することを目的とする。

構成概念的妥当性については、Erikson の漸成発達理論において、各発達段階は相互に関連すると仮定されているため、第I段階の感覚を測定する基本的信頼感尺度 (谷, 1998)、および、第V段階の同一性の感覚を測定する MEIS (谷, 2001a) との関連を分析することによって検討する。また、親密性が高いほど、異性不安は低いと考えられるため、異性不安尺度 (冨重, 2002) を用いて、親密性尺度の構成概念的妥当性を検討する。さらに、パス解析を用いて、第I段階の感覚である基本的信頼感、および、第V段階の感覚である同一性の感覚と、親密性尺度で測定された親密性の感覚の因果関係を検討することによって、親密性尺度の妥当性を検討する。なお、Hodgson & Fisher (1979) によると、男女によって同一性と親密性の発達の順序が異なり、女性は同一性と親密性が平行して発達するという指摘もあるため、多母集団同時分析によって、男女間の因果関係が異なるかどうかについても検討する。

2. 方法

(1) 調査協力者

兵庫県内の大学生200名(男96名, 女104名)。年齢18~25歳(平均20.35歳, $SD = 1.32$)。

(2) 測定尺度

① 親密性尺度

先述した親密性の定義に基づき, Erikson (1950, 1959, 1968, 1982) の記述をできるだけ忠実に参考にして, 10項目を作成した。なお, Rasmussen (1964) の尺度のように, 下位概念を設定しているものを含めて, これまでの親密性尺度は, すべて1次元構造を仮定している。また, 先述した親密性の定義においても, 1次元構造を仮定することが適切と判断した。したがって, 本研究においても, 作成にあたっては, 1次元構造になることを仮定して, 項目収集を行った。そして, パーソナリティ心理学を専門とする大学教員1名および大学院生2名に内容的妥当性の検討を依頼し, 一部, 項目表現などを修正した上で, 全10項目について最終的に全員から合意を得て, 内容的妥当性が確認された。「全くあてはまらない」~「非常にあてはまる」までの7段階評定(1~7点)。

② MEIS

谷 (2001a) によって作成された Erikson の漸成発達理論の第V段階における同一性の感覚を多次元的に測定する20項目からなる尺度。「自己斉一性・連続性」, 「対自的同一性」, 「対他的同一性」, 「心理社会的同一性」の4下位尺度(各5項目)によって構成される。「全くあてはまらない」~「非常にあてはまる」までの7段階評定(1~7点)。本研究における α 係数は「自己斉一性・連続性」で.87, 「対自的同一性」で.82, 「対他的同一性」で.81, 「心理社会的同一性」で.82, MEIS全体で.81であった。

③ 基本的信頼感尺度

谷 (1998) によって作成された Erikson の漸成発達理論の第I段階における発達の危機である「基本的信頼 対 基本的不信」に由来する感覚を測定する6項目からなる尺度。「全くあてはまらない」~「非常にあてはまる」までの7段階評定(1~7点)。本研究における α 係数は.76であった。

④ 異性不安尺度

富重 (2002) によって作成された異性とのコミュニケーション

に対する不安の度合いを測定する9項目からなる尺度。「全くあてはまらない」~「非常によくあてはまる」までの6段階評定(1~6点)。本研究における α 係数は.91であった。

(3) 調査時期および手続き

2009年11月に, 上記尺度からなる質問紙を講義時間に配布し, 集団的に実施した。なお, 倫理的配慮として, 実施にあたっては, 調査の匿名性等を十分に説明し, 同意を得られる場合に回答するように説明した。

3. 結果

(1) 親密性尺度の主成分分析および信頼性の検討

親密性尺度項目は1次元構造を仮定して作成されているため, 親密性尺度の10項目に関して, 主成分分析を行った。第1主成分負荷量についての結果をTable1に示す。それによれば, いずれの項目においても, 第1主成分負荷量が.49~.83と高かった。第1主成分から第3主成分までの寄与率は, 47.1%, 13.2%, 7.9%となっており, 第1主成分への寄与率がかなり高く, また, 第2, 3主成分では寄与率が大きく落ち込んでいる。固有値についても同様な傾向がみられ, 第3主成分までの固有値は順に, 4.72, 1.32, 0.79と, 第1主成分から第2主成分にかけて, 大きな落ち込みがみられる。したがって, これらのことから, 親密性尺度は, 明らかに1次元構造を持っていることが確認された。

α 係数を算出したところ, $\alpha = .87$ であり, 内的整合性の観点からの信頼性は高いと判断された。

なお, 親密性尺度の平均値は47.9, $SD=10.3$ であった。Hodgson & Fisher (1979) の研究によれば, 青年期(18~21歳)においては, 男性に比し, 女性の方が親密性の程度が高いとされているが, 本研究の親密性尺度得点について男女間で t 検定を行ったところ, 得点の有意差はなかった($t(198)=1.74, p=.97$)。

(2) 親密性尺度の構成概念的妥当性の検討

親密性尺度の妥当性を検討するために, 基本的信頼感尺度, MEIS, 異性不安尺度との相関係数を算出した(Table2)。

まず, 基本的信頼感尺度との相関は.52, MEISの下位尺度とは.43~.57, MEIS全体との相関は.66と高い相関があった。これは, 各発達段階の感覚は相互に関連するとされる漸成発達理論と

Table 1. 親密性尺度の主成分分析結果

| 項目 | F1 |
|---|-----|
| 項目6 お互いに信頼し, 心を打ち明けることのできる相手がいる。 | .83 |
| 項目1 自分が困った時に相談できて, 相手が困った時に相談にのれる人間関係がある。 | .82 |
| 項目5 自分を支えてくれる相手がいる, 自分も必要ときに相手の支えになることができる。 | .79 |
| 項目4 親しい人といるときに, お互いが満足し合える関係にある。 | .76 |
| 項目3 人との付き合いは形式的なもので, 自分は本当は孤独だと感じる。* | .68 |
| 項目8 お互いある程度の犠牲を払ってでも助け合えるような人間関係がある。 | .63 |
| 項目9 人と表面的な付き合いしかできない。* | .62 |
| 項目10 自分を見失いそうで, 人を愛することができない。* | .61 |
| 項目2 相手の欲求を満たすことで, 自分が満足できるような人がある。 | .53 |
| 項目7 他人に自分の心を打ち明けると, 自分が呑み込まれそうに感じる。* | .49 |

*が付いている項目は逆転項目を示す。

Table 2. 親密性尺度と各尺度との相関

| | 自己斉一性 ・連続性 | 対自的 同一性 | 対他的 同一性 | 心理社会的 同一性 | MEIS 全体 | 基本的 信頼感 | 異性 不安 |
|-----|---------------|------------|------------|--------------|------------|------------|----------|
| 親密性 | .57*** | .43*** | .57*** | .54*** | .66*** | .52*** | -.26*** |

*** $p < .001$

一致するものであり、構成概念的妥当性を支持するものと判断された。また、第I段階の基本的信頼感尺度よりも、隣接する段階である第V段階のMEIS全体の方が高い相関を示しており、そのような意味でも、漸成発達理論と一致するものであり、構成概念的妥当性を支持するものといえよう。

次に、異性不安尺度との相関は-.26と、やや値は低いものの、有意な負の相関が得られた。このことは、親密性が高ければ異性不安も低いという結果であり、構成概念的妥当性を支持する方向の結果といえよう。

(3) 基本的信頼感、同一性、親密性に関するパス解析

漸成発達理論における第I段階の基本的信頼感、第V段階の同一性の感覚、第VI段階の親密性の感覚は、理論的に仮定されている発達の順序がある。そのため、谷(2008)と同様に、前の発達段階の感覚は、後の発達段階の感覚に影響を及ぼすという因果関係を仮定し、パス解析を行った。観測変数には、基本的信頼感尺度得点、MEIS全体得点、親密性尺度得点を用いた。以下では、各々の観測変数を、「基本的信頼」、「同一性」、「親密性」と表記する。

まず、第I段階の「基本的信頼」は、第V段階の「同一性」と

第VI段階の「親密性」の両者に影響を与え、第V段階の「同一性」は第VI段階の「親密性」に影響を与えるというモデルを構成した。しかし、分析の結果、「基本的信頼」から「親密性」のパス係数は有意でなく、.06と非常に低い値を示した。したがって、「基本的信頼」から「親密性」への直接効果はないということが明らかになった。

そこで、「基本的信頼」は「同一性」に影響を与え、「同一性」は「親密性」に影響を与えるというモデルを構成した(Figure1)。「基本的信頼」から「同一性」へのパス係数は.75、「同一性」から「親密性」へのパス係数は.66と高く、いずれも有意であった。また、「基本的信頼」から「親密性」への間接効果を算出したところ、.50と高い値を示した。「同一性」の決定係数は.56、「親密性」の決定係数は.43と、決定係数に関しても高く、規定力の高いモデルといえよう。さらに、適合度について検討したところ、GFI=.998、AGFI=.988、RMSEA=.000であり、GFIおよびAGFIが.90以上、RMSEAが.05未満であることから、適合度は非常に高いといえよう。それゆえ、この因果モデルが適切なモデルとして採用された。

この結果から、「基本的信頼」は「親密性」には直接効果をもたず、「同一性」を介した間接効果のみを与えており、「親密性」に

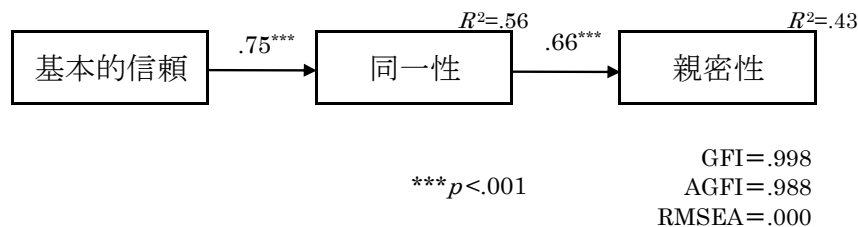


Figure 1. 基本的信頼感、同一性、親密性に関するパス解析結果(誤差項は省略)

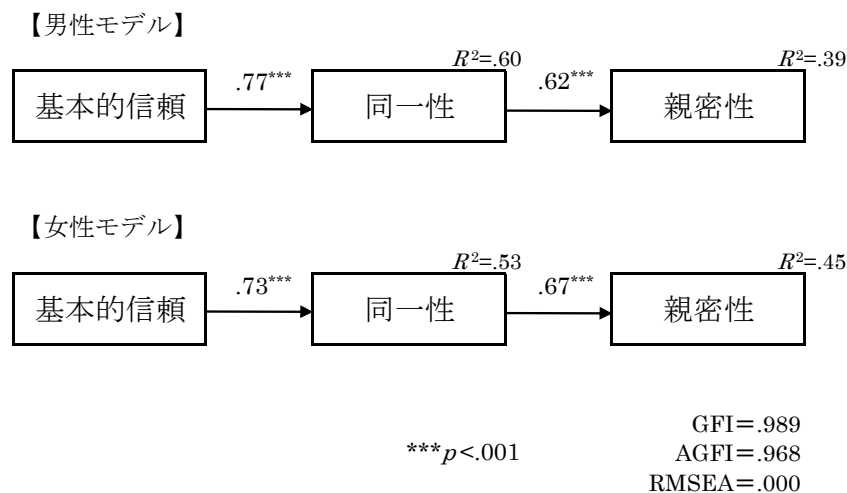


Figure 2. 等値制約をかけた場合の男性モデル(上)と女性モデル(下)(誤差項は省略)

直接効果を与えているのは「同一性」であることが明らかになった。漸成発達理論によれば、「同一性」と「親密性」は、第Ⅴ段階と第Ⅵ段階で隣接しており、「同一性」から「親密性」に直接効果があることは、妥当な結果と考えられる。また、漸成発達理論において、第Ⅵ段階とは離れている第Ⅰ段階の「基本的信頼」は「親密性」に対して直接効果がなく、「同一性」を介した間接効果のみもつという結果も、漸成発達理論を支持するものと考えられる。これらの結果は、本研究における親密性尺度の妥当性を示すものと考えられよう。

さらに、Hodgson & Fisher (1979) のように、男女間で同一性と親密性に発達順序の違いがあるという指摘もあるため、男女間で因果関係の違いがあるかどうかを検討するために、多母集団同時分析によって検討した。男性グループ、女性グループに分けて、多母集団同時分析を行い、パラメータ間の有意差について検討したところ、男女間でパス係数の有意差はなかった。そこで、パス係数に等値制約をかけて、再度分析したところ、適合度指標は、GFI=.989、AGFI=.968、RMSEA=.000と、適合度は非常に高かった。なお、等値制約をかけないモデルと等値制約をかけたモデルを比較すると、有意差はなかった ($p=.90$)。したがって、パス係数は等値であると判断される。等値制約をかけた男性のモデルと女性のモデルを Figure2 に示す。この結果から、男女間で因果関係の差はなく、男女ともに同一の因果モデルが適用できることが明らかになった。つまり、「基本的信頼」の程度が「同一性」の形成の程度に影響を与え、「同一性」の形成の程度が「親密性」の程度に影響を与えるということは、男女ともに同一であることが明らかになったといえる。

4. 考察

(1) 親密性尺度の1次元性、信頼性、平均値について

親密性尺度の主成分分析結果から、第1主成分負荷量が.49～.83と高く、第1主成分寄与率が47.1%と高かったことなどから、親密性尺度は明らかに1次元構造をもっていることが確認された。親密性尺度は、項目収集時に、1次元構造をもつことを仮定して作成されたものであるため、妥当な結果が出たものと考えられる。

また、 α 係数は.87であり、内的整合性の観点からは、親密性尺度の信頼性は高いといえよう。

なお、親密性尺度得点の平均値について、男女間で比較したところ、有意差はなかった。Hodgson & Fisher (1979) の研究によれば、18～21歳の青年を対象とした親密性ステータス面接の結果から、男性よりも女性の方が親密性の程度が高いとされているが、サンプル数も非常に少なく、統計的データとしても、はっきりした結果は得られていない。それゆえ、Hodgson & Fisher (1979) の男性よりも女性の方が親密性の程度が高いという結果は信頼できるものではないといえる。そもそも、Erikson (1959) は、親密性の程度に男女差があるという指摘はしておらず、第Ⅵ段階の「親密性 対 孤立」の発達の危機は、男女ともに直面するものであるとしている。それゆえ、本研究で作成された親密性尺度は、男女に関わらず、適切に親密性の程度を測定できる有用な尺度であるといえるであろう。

(2) 親密性尺度の構成概念的妥当性について

親密性尺度の構成概念的妥当性を検討するために、漸成発達理論における第Ⅰ段階の感覚を測定する基本的信頼感尺度、第Ⅴ段階の同一性の感覚を測定する MEIS、そして、異性不安尺度との相関を検討した。

漸成発達理論では、各発達段階における構成要素は相互に関連するとされているが、親密性尺度は、基本的信頼感尺度とも MEIS とも高い相関を示し、構成概念的妥当性は確認されたといえよう。特に、基本的信頼感尺度とは .52、MEIS 全体とは .66 の相関係数を示し、第Ⅰ段階の基本的信頼感尺度よりも、隣接する段階である第Ⅴ段階の MEIS 全体の方が高い相関を示したことは、漸成発達理論に一致する結果であり、このことから構成概念的妥当性を支持する結果が得られたといえよう。

また、異性不安尺度とは、-.26 と値は若干低いものの、有意な負の相関があった。これは、親密性が高いほど、異性不安が低いという結果であり、構成概念的妥当性を支持する方向の結果であった。なお、若干、相関係数の値が低く出たのは、親密性尺度が異性との親密性だけでなく、様々な人々と相互性をもった親密性を測定しているのに対して、異性不安尺度は異性とのコミュニケーションに対する不安の度合いのみを測定しているためであると考えられよう。すなわち、親密性尺度は、異性との関係のみに限定されない様々な人々との親密性を測定しているが、異性不安尺度は、異性とのコミュニケーションに対する不安に限定されているため、一部しか関連しなかったと考えられる。その意味では、-.26 という相関係数は、決して低いものではなく、むしろ妥当な結果であると判断できるであろう。

(3) 基本的信頼感、同一性、親密性に関するパス解析について

観測変数に、基本的信頼感尺度得点、MEIS 全体得点、親密性尺度得点を用いて、漸成発達理論に基づき、前の発達段階の感覚は、後の発達段階の感覚に影響を及ぼすという因果関係を仮定し、パス解析を行った。

当初、前の発達段階の感覚は、後の発達段階の感覚に影響を及ぼすという仮定のため、第Ⅰ段階の「基本的信頼」は、第Ⅴ段階の「同一性」と第Ⅵ段階の「親密性」の両者に影響を与え、第Ⅴ段階の「同一性」は第Ⅵ段階の「親密性」に影響を与えるというモデルを構成したが、分析の結果、「基本的信頼」から「親密性」のパス係数は、有意でない上に、.06 という非常に低い値を示した。このことから、「基本的信頼」から「親密性」への直接効果はないということが明らかになった。

そこで、「基本的信頼」は「同一性」に影響を与え、「同一性」は「親密性」に影響を与えるというモデルを構成した。その結果、このモデルは、パス係数、決定係数が高く、適合度も非常に高いモデルであり、このモデルが適切なモデルとして採用された。

これらの結果から、「基本的信頼」は、「親密性」には直接的には影響を与えておらず、「同一性」を介した間接効果のみを与えていることが明らかになった。このことは、「基本的信頼」が直接的に影響を与えるのは「同一性」の形成であって、「基本的信頼」が高いことによって「同一性」の形成が促進され、その「同一性」の形成の程度が「親密性」に影響を与えるということを示すもの

であった。Erikson (1959) は、基本的信頼は、同一性の感覚の基礎を形成し、それが後には同一性の感覚として統合されると述べているが、「基本的信頼」が「同一性」に直接的に影響を及ぼすという本研究の結果は、そのような Erikson (1959) の指摘と一致し、妥当なものであるといえよう。そして、Erikson (1959) の指摘通りに「基本的信頼」は「同一性」に直接効果を与えるが、Erikson は「基本的信頼」と「親密性」に関して直接的な関連性は述べておらず、漸成発達理論において段階が離れている「親密性」には影響を直接的には与えずに、「同一性」を介して「親密性」に間接効果を与えるという結果も、Erikson の漸成発達理論と一致した妥当な結果と思われる。

また、隣接している段階である第V段階の「同一性」から、第VI段階の「親密性」へは、直接効果があり、これも漸成発達理論からすれば妥当な結果と考えられる。Erikson (1959, 1968) は、真の親密性が可能になるのは、適切な同一性の感覚が形成された後だけであると述べているように、同一性の感覚の形成が、親密性を築く前提とされている。したがって、「同一性」から「親密性」に対して直接効果があることは、「同一性」の形成が前提となって「親密性」が形成できることを示すものであり、Erikson の漸成発達理論を支持する妥当な結果といえよう。

Hodgson & Fisher (1979) は、男女によって同一性と親密性の発達の順序が異なり、女性は同一性と親密性が平行して発達し、男性と女性では発達の経路が異なると指摘している。しかし、Hodgson & Fisher (1979) は、同一性ステイタス面接と親密性ステイタス面接を行った結果からそのような指摘をしているが、実際には同一性ステイタス面接における領域の高低と親密性ステイタス面接結果によって発達経路を仮定しているだけであり、男女の発達経路が異なるという指摘は単なる推論に過ぎないため、恣意的なデータ解釈による不適切な考察といえる。また、被験者の人数も少ない上に、統計処理も不適切な部分が散見されるとともに、同一性ステイタス面接法は、同一性測定の方法としては不適切なものであり(谷, 2001b, 2008), Hodgson & Fisher (1979) の研究結果は信用できるものではない。

本研究では、多母集団同時分析を用いて、男女間のパス解析による因果モデルを比較検討した。その結果、男女間でパス係数に有意差はなく、パス係数に等値制約をかけても、モデルの適合度は非常に高く、男女ともに同一の因果モデルが適用できることが明らかになった。すなわち、この結果から、男女ともに、「同一性」の形成が前提となって、「親密性」が形成されることが示されたといえよう。このことは、先述したように、真の親密性が可能になるのは、適切な同一性の感覚が形成された後だけであるとする Erikson (1959, 1968) が指摘する元来の主張を支持するものであり、妥当な結果といえるであろう。

以上のようなパス解析の結果は、いずれも Erikson の漸成発達理論を支持する結果になっている。したがって、これらの結果は、本研究における親密性尺度の妥当性を支持するものでもあるといえよう。

このように、本研究においては、Erikson の漸成発達理論と一致し、従来の親密性に関する尺度の欠点を解消した新たな親密性尺度が作成されたと結論づけられるであろう。

(4) 今後の課題

本研究においては、親密性尺度の信頼性について、内的整合性の観点からのみ、信頼性の検討を行ったが、再検査法によって、時系列的な安定性についても信頼性は検討すべきである。今後は、再検査法による信頼性の検討が必要であろう。

また、本研究においては、Erikson によって提唱された各発達段階における構成要素の感覚を測定する従来の日本語版尺度(宮下, 1987; 三好・大野久・内島・若原・大野千里, 2003)と同様に、大学生の年代にあたる青年期を対象として尺度構成を行った。これは、Erikson の漸成発達理論においては、後の段階の構成要素は、前段階においても、その前駆的なものが存在すると仮定されているとともに、Erikson (1959, 1968) によると、青年期の同一性の形成上、親密性の問題が発生するという指摘によるものであるが、実際には第VI段階の「親密性対孤立」は、成人前期の発達の危機として位置づけられている。したがって、もう少し年長者である成人前期にあたる人々を対象として、妥当性等を検証する余地が残されている。

さらに、本研究において作成された親密性尺度を用いて、青年期から成人期にかけての発達の問題や、親密性と他のパーソナリティ変数との関連性を検討する研究をすることが、今後の課題として残されているであろう。

しかしながら、本研究における新たな親密性尺度は、パス解析等で統計的にも厳密に作成されており、Erikson の漸成発達理論と様々な点で一致する妥当性をもった尺度として、今後のパーソナリティ発達の研究に有用な尺度と考えられ、今後、この尺度を使用した研究が期待される。

引用文献

- Erikson, E.H. (1950). *Childhood and society*. New York: W.W. Norton & Company. (仁科弥生(訳)(1977, 1980). 幼児期と社会1・2 みすず書房)
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W.W. Norton & Company. (小此木啓吾(訳編)(1973). 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W.W. Norton & Company. (岩瀬庸理(訳)(1973). アイデンティティ 金沢文庫)
- Erikson, E.H. (1982). *The life cycle completed*. New York: W.W. Norton & Company. (近藤邦夫・村瀬孝雄(訳)(1989). ライフサイクル, その完結 みすず書房)
- Hodgson, J.W., & Fisher, J.L. (1979). Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 37-50.
- 宮下一博(1987). Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, 35, 253-258.
- 三好昭子・大野久・内島香絵・若原まどか・大野千里(2003). Ochse & Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版(S-ESDS)作成の試み 立教大学心理学研究, 45, 65-76.
- 中西信男・佐方哲彦(1993). EPSI エリクソン心理社会的段階目

- 録検査 上里一郎 (監修) 心理アセスメントハンドブック
西村書店 pp.419-431.
- Ochse, R., & Plug, C. (1986). Cross-cultural investigation of the validity of Erikson's theory of personality development. *Journal of Personality and Social Psychology*, *50*, 1240-1252.
- 大野 久 (1995). 青年期の自己意識と生き方 落合良行・楠見孝 (編) 講座 生涯発達心理学 4 自己への問い直し：青年期 金子書房 pp.89-123.
- Rasmussen, J.E. (1964). The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, *15*, 815-825.
- Rosenthal, D.A., Gurney, R.M., & Moore, S.M. (1981). From trust to intimacy: A new inventory for examining Erikson's stage of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, *10*, 525-537.
- 谷 冬彦 (1998). 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, *9*, 35-44.
- 谷 冬彦 (2001a). 青年期における同一性の感覚の構造－多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成－ 教育心理学研究, *49*, 265-273.
- 谷 冬彦 (2001b). アイデンティティ・ステイタス・パラダイムに対する批判的検討 (I)－基本的問題－ 神戸大学発達科学部研究紀要, *9*, 31-39.
- 谷 冬彦 (2008). 自我同一性の人格発達心理学 ナカニシヤ出版
- 鑓幹八郎・山本 力・宮下一博 (共編) (1984). 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版
- 富重健一 (2002). 交際に不安を感じる 松井 豊 (編) 対人心理学の視点 プレーン出版 pp.151-164.